



今も生きる、ここぞ生きる

東京での介護の仕事によく慣れてきた20代後半に病気が見つかり、家族のいる多賀城に戻るようになった。

故郷で、療養中の女性たちと応援してくれる人たちとも出会った。今の自分にあるものをいかして、自分でも何かできることはないだろうか。

「自分と同じ志をもっている人たちや、自分を支えてくれる人たちの人生を少しでも豊かにしたい」

そんな思いから、がんサバイバー専門の写真サービスを始めた。プロのヘアメイクアーティストとスタイリストの力を借り、今を生きる自分を輝かせ、最高の自分に私自身もなりたかった。

様々な人の協力を得て、図書館で、その写真展を開催できることになった。展示会の初日、訪れた人々と話をするうちに自然と涙が溢れてきた。

私が生まれたこのまちを、愛おしく思えたのは、自然と寄り添える、一緒に汗水流して、喜びを分かち合える仲間と出会えたからだと思う。

そのことに気づいた自分を、少し誇らしく思えた瞬間だった。帰ったら家族にも話してみよう。



多賀城市市長公室行政経営担当
985-8531 宮城県多賀城市中央2-1-1 022-368-1141(内線213)
令和3(2021)年3月発行
第六次多賀城市総合計画の周知用として作成した冊子(タブロイド版)です。
第六次多賀城市総合計画の将来都市像など詳細については、こちらをご覧ください。



このまち、多賀城に、そこかしこに息づく、みらいへの可能性
それは、自然や歴史や文化であったり、そこに暮らす人の温かざであったりします。

そうした多賀城らしい個性を礎に、ここに暮らすみんなの手によって、古いものを大切にしながら新しいものを受け入れ、時代の流れを意識しながら、多賀城ならではの文化が創られてきました。



令和3(2021)年4月から10年間のまちづくりを示す、「第六次多賀城市総合計画」では、こうしたみんなの思いが「日々のよろこびふくらむまち 史都 多賀城」というフレーズに込められています。



ありのままの自分。人とのつながりに感謝。
だからこそ、やってみよう、前を向いて歩こうと思える。
そんな暮らしを、このタブロイドの7つのストーリーを読みながら創造してみませんか？



日々のよろこび
ふくらむまち
史都 多賀城

このまち 多賀城で
自分だけじゃなく、一人ひとり誰もが楽しみ、
たくさんの幸せ(well-being)がふくらみますように。

日々のよろこびふくらむまち

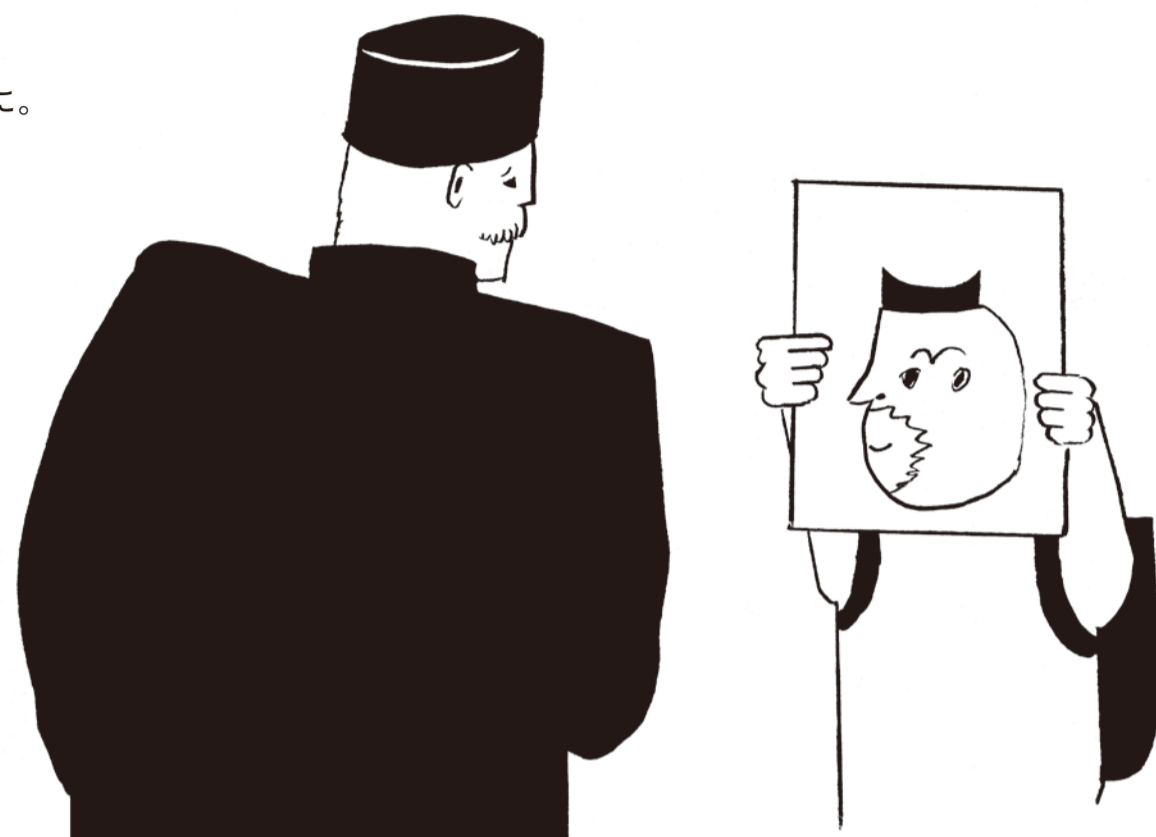
登下校の見守り

「おはようございます!」

元気な子どもたちとの挨拶が、私の1日の始まり。
この店を開いた頃からだから、もう40年近くになる。
開店前の掃除のついでのつもりが、
帰りの様子も気になり、下校の時間帯にも立つように。
「おかげで安心して通わせられる」
なんて言ってもらえることもあるけど、
続けているのはこの時間が好きだから。
子どもたちの元気な姿を見るのが嬉しくて、
自分も元気をもらえるから。

嬉しいことに、
子どもたちからプレゼントをもらうこともある。
「ありがとう」と大きく書かれた手紙や私の似顔絵、
これまでもらったものはすべて店の壁に貼ってある。

どんなに日焼けしても、
絶対に剥がすことはない、私の宝ものだ。



新しい命の誕生

息子が生まれたのは、真冬の夜中だった。
病室でようやく生まれた我が子を眺めながら、ここへ来てから初めて空腹を感じた。
「母の漬物が食べたい」と思った。
あのしょっぱくて、パリッとした歯ごたえのきゅうり漬けが、無性に食べなくなった。

おばあちゃんは私が生まれる前から、「漬物上手」と近所で評判だったらしい。
「しょっぱいのが、うまいんだ」と言うおばあちゃんの塩加減。
それを母もやはり受け継いでいた。

息子が生まれてから初めての夏。「家の畑で採れたから」と、
ご近所からいただいたたくさんのかきゅうりで、
母に教わりながらきゅうり漬けを初めて漬けた。
息子の顔を見に来てくれる人たちに、自分の漬物を出す。
母の味とはほど遠いけれど、一人前に近づいたようでうれしかった。

私の口のなかで、きゅうりのバリバリと鳴る音が響く。
息子が不思議そうにこちらを見つめる。
あどけないその顔に、母とくすくすと顔を見合わせた。
このまちで母になり、このまちでおばあちゃんになる。
そう心に決めた。

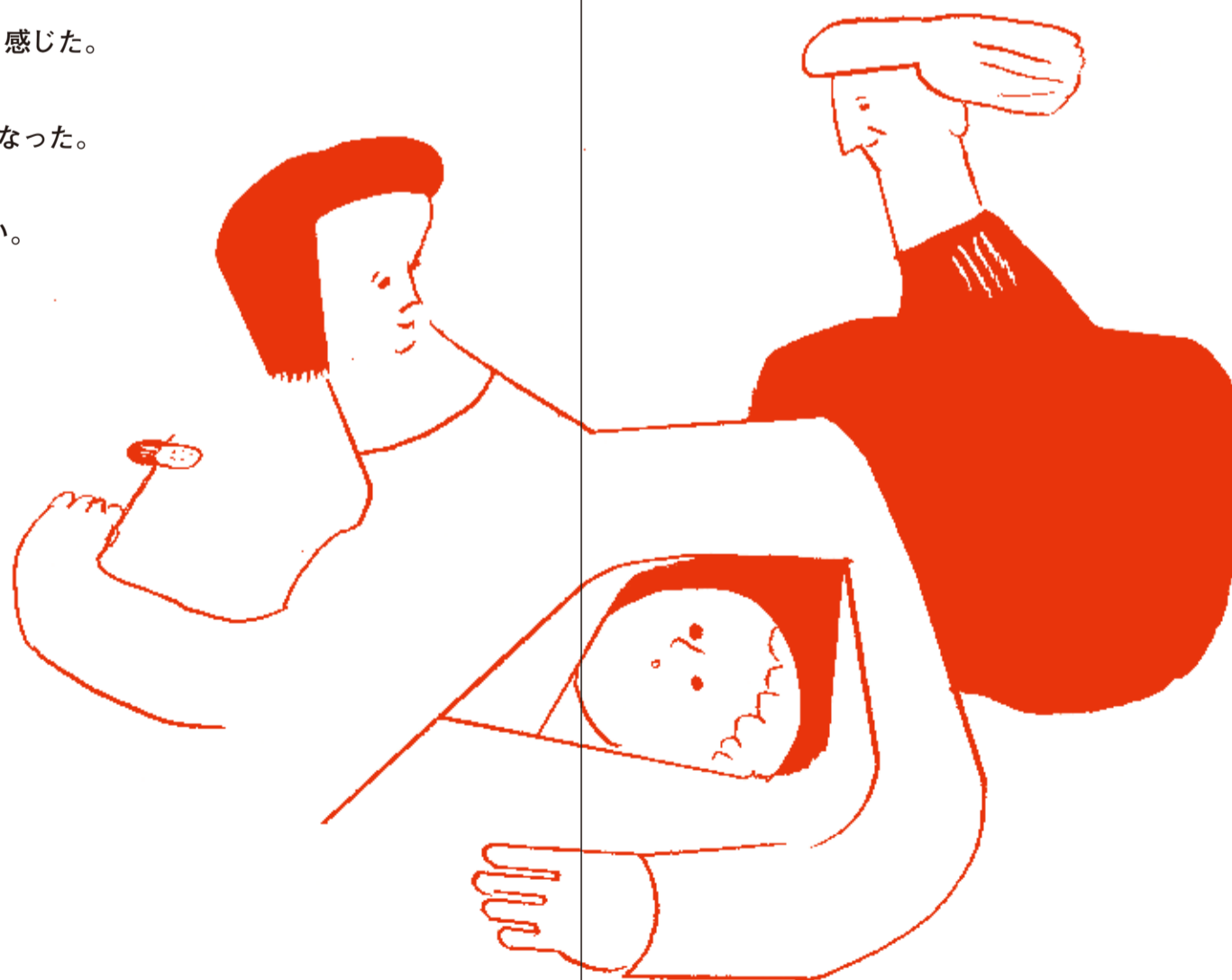


食と自然

古代米というお米のことを、私は知らなかった。
それはいつも食べている白いお米とは違って、黒っぽいものだった。
学校の授業で農家さんの田んぼに行き、一緒に稲刈りをさせてもらった。
稲わらをしっかり握りしめ、ノの字型の鎌で根本のあたりを切り落とす。
「わあ!」
「できた!」
ちょっとこわかったけど、うまくできるとみんなうれしくて、夢中で刈った。

お昼ごはんに古代米のおにぎりを頬張りながら、農家さんの話を聞くと、
夏の田んぼでは、今でもヘイケボタルが見られ、
小さな光があちこちに灯るのだという。
「ホタルはね、タニシなどの貝を食べながら田んぼのなかで冬を越し、
夏がくる頃にサナギから脱皮して飛び立つの。
タニシがいるような豊かな環境じゃないと、ホタルも暮らせないんだよ」

ホタルの話をお母さんにしたら、そのことを覚えていてくれて、
この夏はお母さんが友だちも一緒に田んぼに連れて行ってくれた。
スズムシの鳴き声が響きわたる暗闇のなか、小さな光が点滅する。
ふわりふわりと浮かび上がっては田んぼのなかに消えていった。
「きれいだね」
「来年も見られるかな」
「また一緒に来ようよ」
約束ねって、つないだその手がうれしかった。



町の中のアート

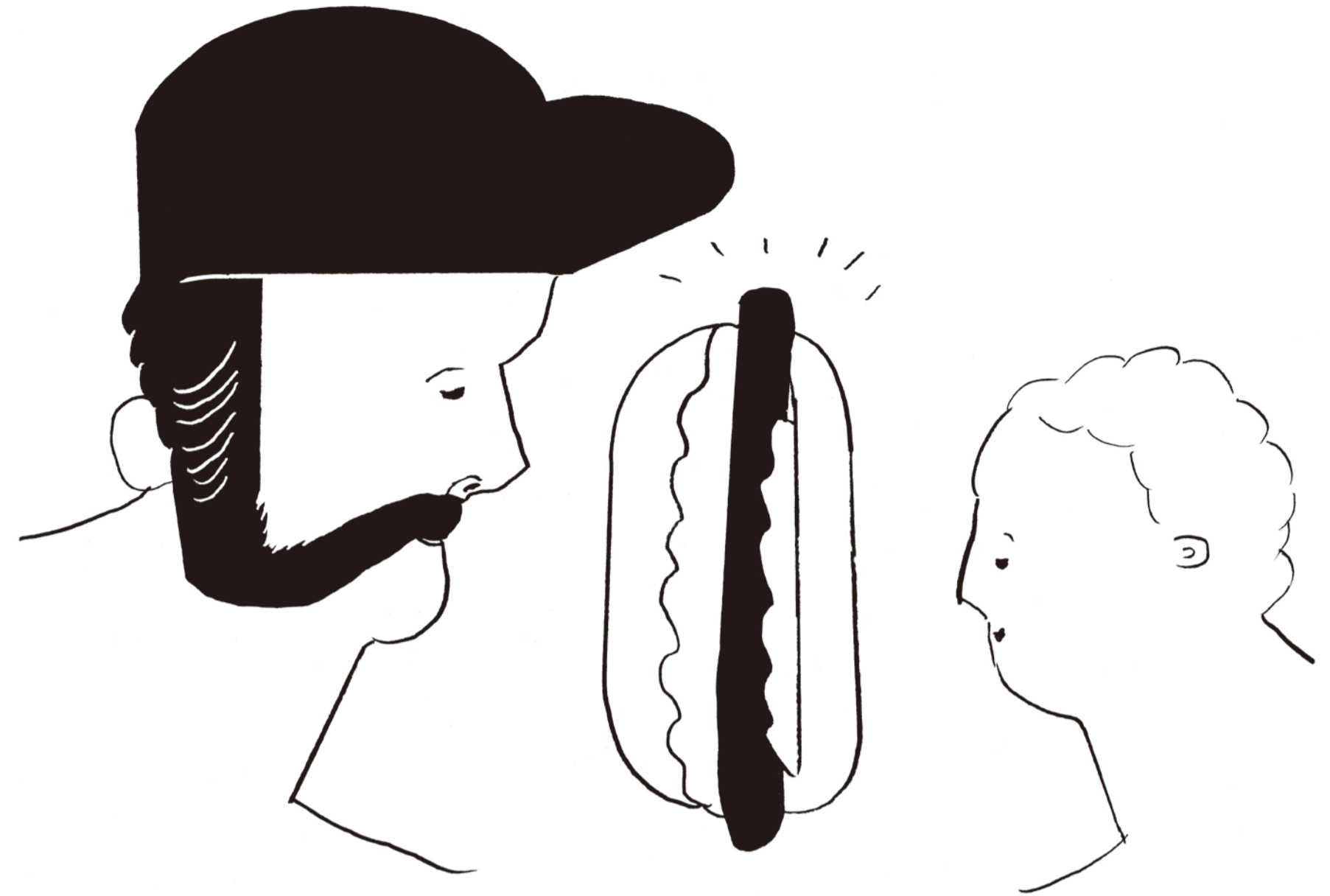
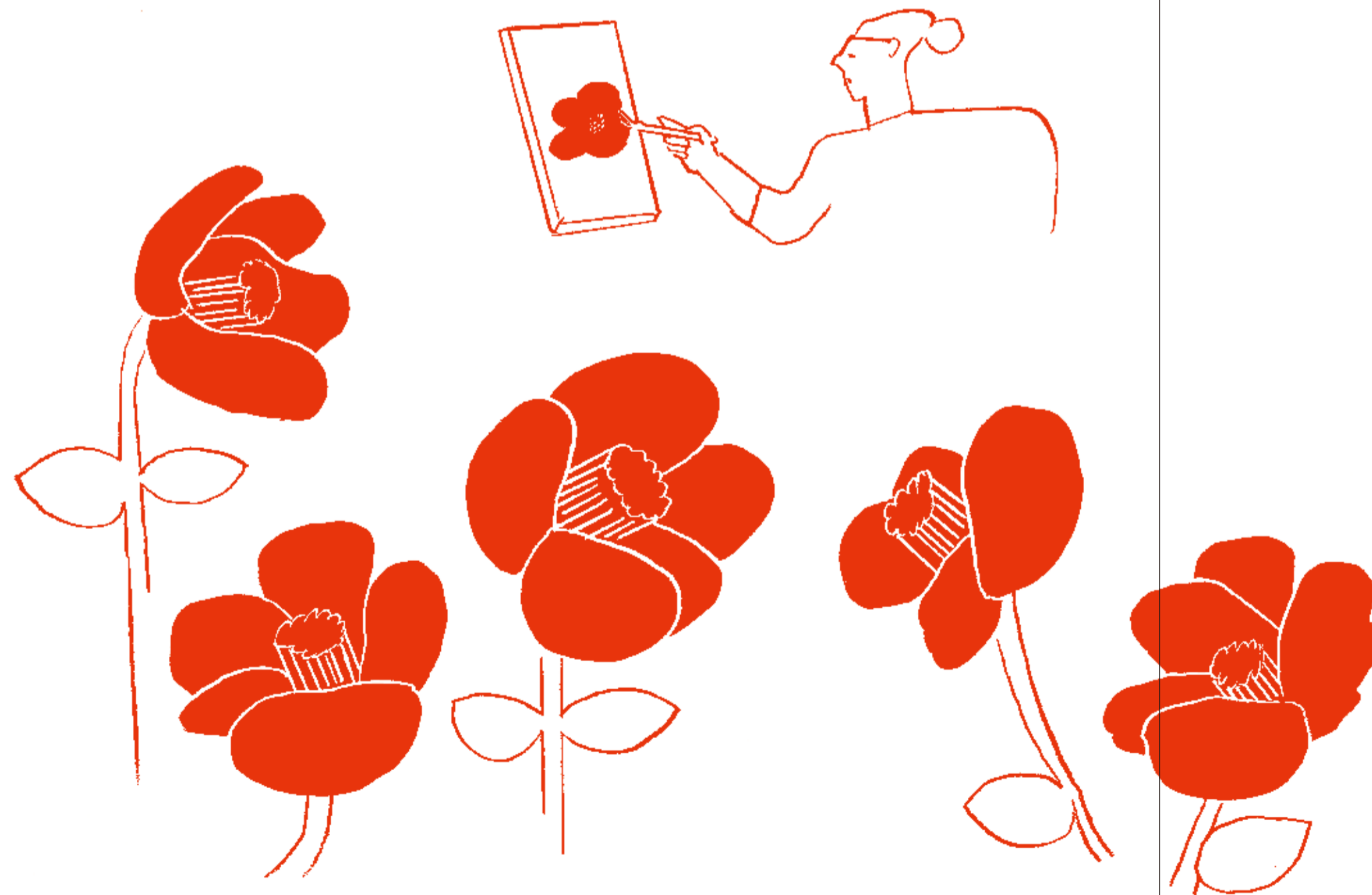
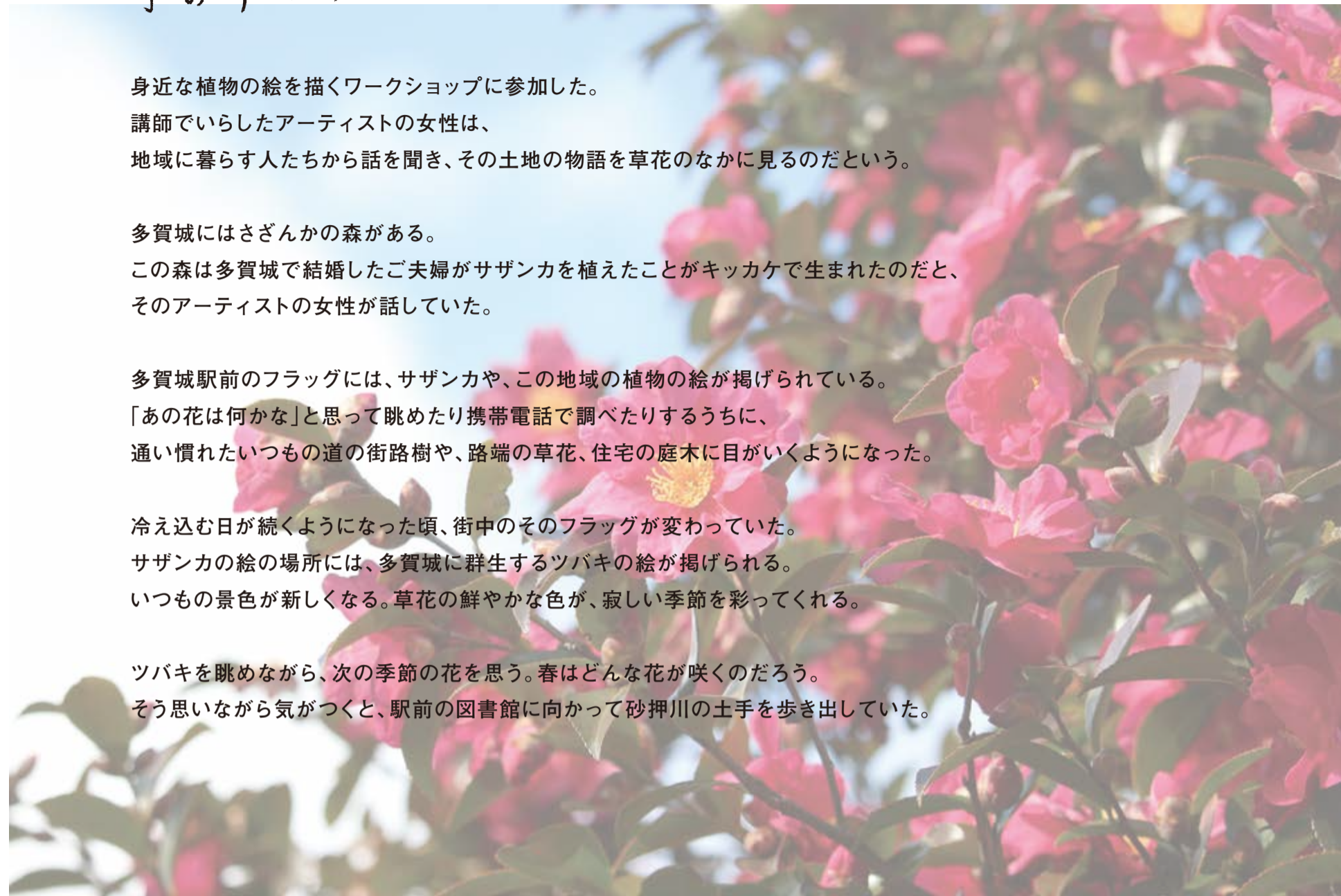
身近な植物の絵を描くワークショップに参加した。
講師でいらしたアーティストの女性は、
地域に暮らす人たちから話を聞き、その土地の物語を草花のなかに見るのだという。

多賀城にはさざんかの森がある。
この森は多賀城で結婚したご夫婦がサザンカを植えたことがキッカケで生まれたのだと、
そのアーティストの女性が話していた。

多賀城駅前のフラッグには、サザンカや、この地域の植物の絵が掲げられている。
「あの花は何かな」と思って眺めたり携帯電話で調べたりするうちに、
通い慣れたいつもの道の街路樹や、路端の草花、住宅の庭木に目がいくようになった。

冷え込む日が続くようになった頃、街中のそのフラッグが変わっていた。
サザンカの絵の場所には、多賀城に群生するツバキの絵が掲げられる。
いつもの景色が新しくなる。草花の鮮やかな色が、寂しい季節を彩ってくれる。

ツバキを眺めながら、次の季節の花を思う。春はどんな花が咲くのだろう。
そう思いながら気がつくと、駅前の図書館に向かって砂押川の土手を歩き出していた。



ビアサミット

正直なところ、マルシェやイベントはどれも苦手だった。
店は自分一人でやっているから、ただでさえ時間が足りない。
けれどいつもよくしてくれているお店仲間に誘われて、
多賀城駅前で開催されるビアサミットに参加することになってしまった。

店はいつも夜しかやっていないので、明るい時間に料理を作ること自体が珍しい。
慣れない仮設店舗でおろおろ準備をしていると、駅のほうから男の子がやってきた。

「おじさん、何つくってるの？」

「ホットドッグだよ」

「ふうん、それってほくも食べられる？」

「食べられるよ」

「誰でも食べられるかな？」

「どうだろうね」

男の子は、パンの端からぐっと飛び出したソーセージをしげしげと眺めてから、
またどこかに行ってしまった。

でもしばらくして戻ってくると、

「おじさん、ひとつお願い」と言って握りしめた小銭を差し出した。

好きなものを選ばせると、だいぶ迷ってから「これにする」と言い、にっこり笑って駆けて行った。

その先には、母親とおぼしき女性と、ベビーカーに乗った赤ちゃんがいた。

男の子は、赤ちゃんにそのホットドッグを渡し、母親は笑いながら何事かを話しかけている。

手のひらに残された小銭からは、まだぬくもりが伝わっていた。

出会いと発見

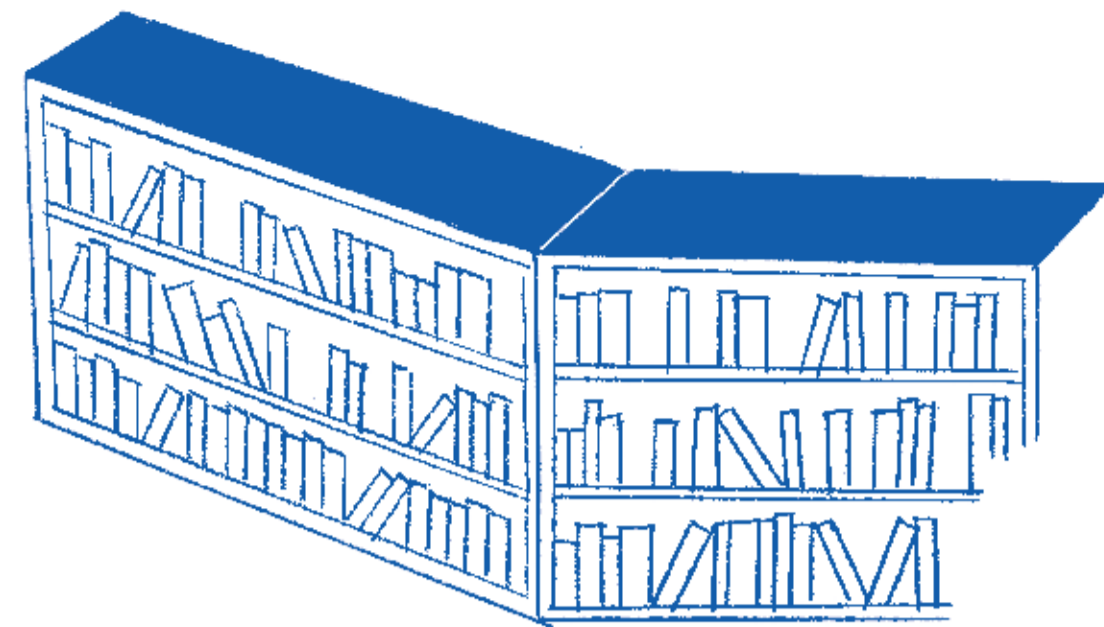
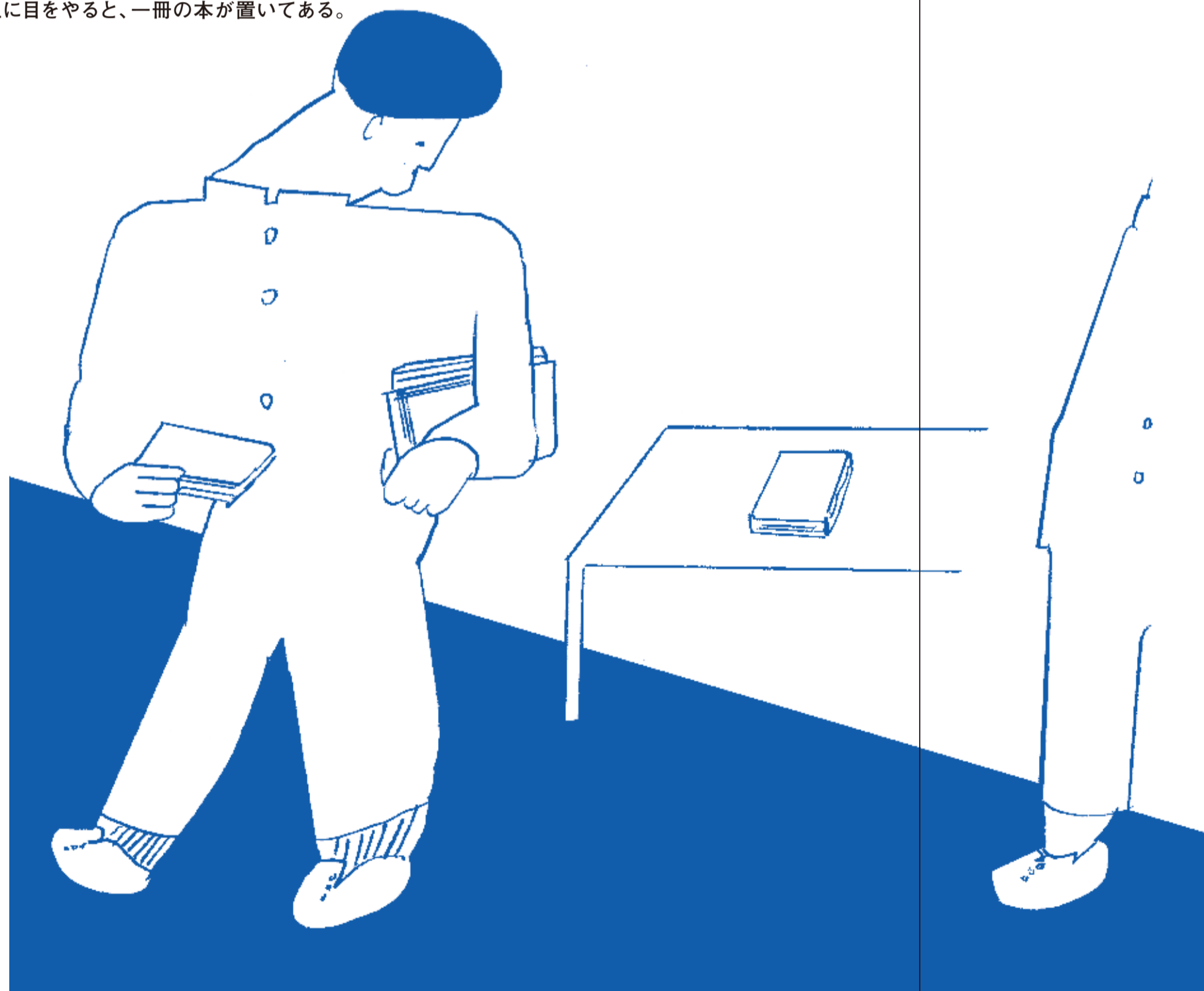
高校3年の時、同じ作家の小説が好きな親友が隣のクラスにいた。
お互いの好きな小説を読んだあとに、細かい場面についてあれこれ言いながら議論する。
その時間はなにより楽しいものだった。

けれど卒業式も間近に迫ったある日、
いつもみたいに小説のことを話しているとき、僕はつい強い言葉で彼の感想を否定してしまった。

「そんなふうに言わなくてもいいだろう」
彼は黙り、その日はそのまま別れた。
その次の日も、彼は僕と顔を合わせようとせず、結局関係を修復できないまま卒業式を迎えてしまった。

卒業式の早朝に届いた親友からのメール。
「学校が終わったら、図書館の1階で待ち合わせしよう」

いつものテーブルに、彼の後ろ姿が見える。ドキドキしながら声をかけると、
「おお。なにしてた？」
あまりに変わらない笑顔。テーブルの上に目をやると、一冊の本が置いてある。
それは僕が一番好きな本だった。



何も言えなくて、じっと本を眺めていた。恥ずかしいけど、涙が出そうだったから。
「今日は外でマルシェやってるんだな。なんか食べ行こう」
そう言って立ち上がり、彼はさっさと歩き出す。

外に出ると、まだ少し肌寒い時期なのに、マルシェに人だかりができていた。
普段足を運ぶことのない、近所の居酒屋のおにいちゃんが見えた。
「よう」とこちらに大きく手を挙げる。
そのいつも通りの飾らないようすに、ふっと心がほどける。僕も急いであいさつを返す。

大学進学でこの街を離れるけど、まだまだ知らない多賀城の風景があるんだろうな。
本を読むたび、発見があるように。
「成人式の時も、そして、その先の未来も何かあったら、この図書館で待ち合わせような。
いつものテーブルで」
その時、あの席からはどんな景色が見えるのだろう。
僕たちは、どんな話をするだろう。
「うん、必ず」
僕たちは、約束した。

